

(Catalogue de la Villa Tamaris centre d'art)
traduction en Japonais : le texte de Alain Jouffroy.

発見者・再発明者 YAMADA

アラン・ジュフロワ

私は年を重ねるにつれ、芸術家や詩人が自らの人生に与えた意味に比して、自分の人生の意味を問うようになった。感情移入のあまり、時に彼ら芸術家や詩人と私自身を混同することもある。私の抱える問いの中には、明らかに彼らのほうが私自身より遙かに明瞭に答えているものがあると思う。彼らの鏡の中にこそ私は自分の姿が一番はっきりと見いだせる。だからこそ、彼ら自身の言に耳を傾けたのち、時には自分が彼らの代わりに、そして何はともあれ親身な立場から、語る事ができると自負している。

芸術家は出発地点からリスクを負っている。道を見失うリスク、そして全てを失うリスクだ。それは使命なのか運命なのか。芸術家本人が確固たる意思に基づいて行った選択なのか。あるいは、自由の十全な行使に伴う結果を予め承知することなのか。もしくは、それら全て？ 何しろ、芸術家は誰に強制されたわけでもなく自分でこの向こうみずな道を選んだのである。この道は、ノウハウだけでなく知性と直感の領域にも属する何かを創り出すことで、本人が自ら開いた道だ。技師や学者など別の道や、ソキウス(ラテン語「仲間」)の中で踏み固められた道、もう少し確実性のある他の活動を選ぶこともできたであろうに。

ホルヘ・ルイス・ボルヘスはその紀行文集『アトラス』の冒頭でこう宣言している。「人は全て発見者だ。苦味、塩味、凹み、滑らかさ、ざらざらした感触、虹の七色、アルファベット26文字を発見するところから始める。それから人の顔や天の星へと向かう。そして最終的には、自らの無知を疑い始めるか、あるいは自分がほぼ完全に無知であると思ひ込む、もしくは確信することになる。」
画家や彫刻家はこの意味で、大抵の他の人間よりずっと自覚のある「発見者」である。彼らは、自分が身を置くことに決めた心的感覚の世界を探索しながら、触り、眺め、更に意識を集中して考える。ノマド気質で旅の果てに異国に居を定める人間が全てそうであるように、ヴァン・ゴッホ、ゴーギャン、ピカソ、ジャコメッティもそのタイプだった。

YAMADAの場合も然り。1949年岐阜の田舎に生まれた彼もまた、未知の世界に飛び込んでいった芸術家の一人だった。1973年、フランス語を知らぬままにパリに住み始め、ボザールに登録。指導教官セザールはYAMADAに完全に自由な制作をさせてくれた。YAMADAは現在フランス語を話し、読み書きし、パリの芸術家の国際コミュニティに多くの友人を持っている。作品の発表も、パリ、ジュネーブ、アムステルダム、ルーアン、ケルン、そして日本でも行っている。数多くの文章も書いている。大抵は短文で、主に詩や問いかけの形式の隠喩で着想や意思を書いたものだ。

例えば彼は言う。「... 夜を通して、私は光を得るために、一点また一点と、暗闇なる天に向かって穴を穿ちたい。朝が生まれる前に。でも、いかにして？」 (白い穴 2001年)

あるいは更に不可思議に「時には、見捨てられたモノが、私に語りかけることがある。このモノが素材となり、私の体の中で棲息しているヒトと出会い、私の彫刻は生まれる。ある時は、逆に、このヒトがモノに語りかける。私は、その両者の道案内人なのかもしれない。... いつか、私のいないこの風景の中で、多足族だけが遊ぶ時代が訪れるのだろうか...？」

つまり、YAMADAは敢えて生と死の境にある空間に身を置いて制作をしているのだ。そこで、世界にとって、

もしくはYAMADA自身にとっての新たな誕生の到来を待っているのかもしれない。彼の彫刻の中には胎児を表した作品がある。その胎児を麦畑の中で自分の子と並べて撮影したこともある。YAMADAのコレクションの多くが復活と誕生そして死を喚起している。「非恒久的な恒久」...これは日本的なものなのか？ それとも陰陽思想に忠実なのか？ 二極の間に張られた糸をわたる綱渡り芸人の役割と、社会...ありとあらゆる社会に対し自分がとっている精神的リスクを自覚している芸術家は少ない。自分が生きる時代から「遅れている」と同時に「進んでいる」YAMADAはニーチェが「永劫回帰」と呼ぶものに従っているのだ。

永劫に廻り行く同一性、永遠に廻り来る差異、衰退と興隆、古きものと新しきもの、悲劇と喜劇、幸福と不幸、歌と沈黙のサイクル...存在と無そして「人間的な、あまりにも人間的な」ものと超人の永劫回帰、新しい「重心」...これがニーチェ自身によればニヒリズム以外の唯一の救済手段なのだ。YAMADAの作品を、超越の誘惑を一切排除した内在の称揚であると捉えれば、自ずと全てが解ける。彼はキリスト教からも神道からも完全に影響を免れている。

YAMADAの初期の彫刻作品は地面に置かれた「頭」だった。その輪郭はファラオのようであり、アジア的なものではない。初期は石膏で、のちに樹脂で作られたこれらの頭は、兵士の頭---その生死にかかわらず---を連想させるがそれもまた幻想に過ぎない。戦争に加わるには生まれるのが遅すぎたこともあり、YAMADAには戦争への回顧心はない。これらの頭は特性を持たず、静かで晴朗な印象すら与える。英雄でもなく犠牲者でもない、何の変哲もない人間、それだけのことだ。この同じ地球上のそこかしこに住み、自らの変転も知らぬまま、我々が自分に認めている人間の観念の範疇において、あなたや私のような人間である。

パリに来て間もなく、YAMADAは街を散策しながらポスターに魅了されるのに時間はかからなかったようだ。政治的・商業的なメッセージや字や意匠ではなく素材としてのポスターに。彼はポスターを細かく引き裂いてアトリエに蓄積した。それは厚い堆積をなし、彼はその堆積から独自の形を丹念につくりはじめる。レイモン・アンス、ジャック・ヴィルグレ、ミモ・ロテラ等が引き裂いたポスターで作ったものとは全く関係がない。YAMADAは堆積から本格的な紙のモザイクを作り出した。それは一種の個人的な神話を構成している。その神話もまた、宗教とも政治とも日本とも関係がなく、無から生まれた(訳注:"ex nihilo"とルビを振る)ヴィジョンであり、常に見事に創りあげられたものであった。人物や風景にはモデルがない。ときに、写真を合体した作品にはモデルがもちいられていることもあるが、何か特定の伝統に依拠することはない。17年間続いたこの紙のシリーズは、信じられないほど巧みな彼の手によって開発された職人的技術で作られている。クロード・サミュエル画廊(パリ)や彼のアトリエの壁でこれらの作品を目にするたびに私はその美しさに瞠目した。常に刷新された、無垢の状態での突然の出現。YAMADA自身の束縛されぬ伝説のように、全てを超え、全てから外れたところで実現される一連の夢。このシリーズは2000年まで続いた。

これらの作品には、大胆な決断の跡と、完全に独立した精神がある。YAMADAは誰の模倣もしない。彼自身すらも。空虚こそが彼の生来の本質であり唯一の支えであるかのように、ひとりで考え、思いを巡らし、行動するのだ。中心の空虚。だが彫刻を放棄することはない。放棄するかわりに新たに創るのだ。たとえば2003年、彼は『Lune-Soleil-Terre(月-太陽-大地)』というタイトルで、鉄とガラスでできたキャスト付きの非常に奇妙な鉄枠を展示する。かごの中にはアクリル絵の具で描かれた絵が一枚。絵には巨大な顔の上に身を乗り出す二人の人物が描かれている。巨大な顔は、円が目、三角が鼻または開いた口を思わせ、剥き出しの歯がついている。それは陰鬱な三日月を思わせる。解釈の難しい、不思議な彫刻-絵画作品である。この作品では死と生が月と太陽のように対置され、互いに矛盾し合うことはない。その様子は、悲劇的であると同時に取るに足らないことであるかのようにも見える。この展覧会そのものも「...et mes désirs (...そして僕の欲望)」と題されていた。何についての欲望なのか？それはYAMADAは言わない。この謎めいた動く彫刻は、ガラスに絵の具、鏡に掻き傷で描いた作品群の一部を成している。このシリーズでは、人物が並んで窓枠におさまっていたり、廃れた礼拝堂の壁のエクソヴォト(奉納画)のように格子に区切られた絵の中で頭が寄り添っていたりする。

予告された死の予感か？母の死を虫が知らせたのか？「Merci（ありがとう）」と題された文章でYAMADAはこう語る。

「2005年1月3日。ついに、あなたは終着駅に到着。3年前のあなたは、獣のごとく四つんばいで廊下を這っていた。未だ見知らぬ駅に向かって。あなたに最後に会ったのは1年前。あなたは、寝台車で終わりなき旅を続けているようでした。あなたは、酔いどれ電車で揺られていたのか、ただ駅を乗り越してしまったのか、私には定かでなかった。かって、私はあなたから歩くことを教わり、今、また休む事を学んだ。ありがとう。さあ、出かけよう、出発と言う名の駅から。」（帰還者 2005年1月27日）

これらの彫刻は四つんばいの母の姿を表している。YAMADAの母は、ある日、本当に、この驚くべき姿で息子に会いに来たことがあった。その意味で自伝的な作品でもある。この彫刻群とは対照的に、最近の作品は有名なパエストゥム（ポセイドニア）の「飛び込む男」をモチーフにとり、「飛び込み男」が棺の上に描かれているのと同じく、生死の際を描いている。YAMADAはこのモチーフで、アトリエの空間に飛び込む細長く繊細な彫刻、金属製の彫刻/絵画、鉄と皮をつかった彫刻（これについては海際の岩壁の高みに置いて写真を撮っている）をつくった。これらの作品は偉大かつ純粋な一人の芸術家の冒険に満ちた軌跡を凝縮している。その絶え間ない脅迫観念に満ちた執拗な夢は、天頂と天底の間を揺れ動く。

YAMADAは既に1983年、北斎の有名な波に身を投じるパエストゥムの「飛び込む男」を描いた絵に、この万有に対し自らを開く意思を託している。

飛び込む男はYAMADA自身、波はそれ以外のもの全て、他者全てのうねりと雑踏である。極東の文化と西洋の文化が理想的なかたちで融和した新たな文明というパラダイム...この夢を実現するために私はこれまでの人生で可能なことは全てしてきた。私もYAMADAほど見事にその地点に到達できるだろうか？怪しいものだ。

よって、我々は、発見者であり、さすらいの再発明者であるYAMADAに「Merci（ありがとう）」を言わねばならぬ。YAMADAは、他者にも「己とは一つの体に複数の人間が宿った存在であり、自覚しようといまいと絡み合った複数の長い伝統を担っている」ということを認識する手助けをしてくれることだろう。

2008年 アラン・ジュフロワ

（訳 田中晴子）

訳注

*パエストゥムの「飛び込む男」：イタリア、パエストゥム（ポセイドニア）の遺跡に残る、紀元前480～470年に描かれたギリシア絵画。